

現代における居場所なさと自己受容との関わり

N99-6333 山下晃子 (指導教官 朝倉 隆司)

1、目的

本研究の目的は、近年多用されるようになった居場所という言葉の意味を明らかにし、さらに自己受容が居場所においてどのような意味を持つのかを検討することである。

2、研究方法

居場所、自己受容、少年犯罪について書かれている文献や定期刊行物、その他の資料を収集し、文献研究を行った。

3、結果と考察

- 1) 「居場所」という極めて日常的な用語がある種の響きをもって使用されるようになったのは、1980年代に入ってからである。もともと居場所は、学校に行けない子どもたちの学校以外の行き場のことを指していたが、1990年代に入っても不登校が増加の一途をたどり、1992年、文部省による「不登校が特別な生徒にだけ起こりうるものではない」という見解から、居場所は学校不適応問題の枠を超え、心理的な側面からも、教育・福祉の分野を中心に大きく取り上げられることとなった。
- 2) 現代における居場所のとらえられかたは、空間的な要素より心理的な要素が強く、そこでの人間関係のことを居場所としてとらえられている傾向が強い。

萩原は居場所を次のようにまとめている。①「自分」という存在感とともにある。②自分と他者の相互承認という関わりにおいて生まれる。③揺れ動くものであり、今居る居場所が脅かされるとき、より自明性の高い居場所に後退する。④世界(他者・事柄・物)の中での自分のポジションの獲得であり、人生の方向性を生む。

すなわち、居場所における人間関係は自己→他者、自己→自己、他者→自己の三要素からとらえられ、そこでは相互受容、自己実現、サポートといった行動がなされる。(図1)

マズローは、自己受容において受け容れられる自己は、必ずしもプラスイメージを伴うものではないことを説いている。すなわち自分の良いところ悪いところ、すべてを含めて自分であるという

感覚が自己受容であるといえる。

自己→ 他者	信頼・安心 ・自分を理解してもらえている ・自分は愛されている
自己→ 自己	自己受容(良いところ、悪いところ全て含めて、自分は自分で良いという感情) 自己実現(自分の価値観に基づいた理想自己を達成すべく行動)
他者→ 自己	受容(自己→自己において受容されている対象を受容。決して一方的な意味付けはされない) サポート(自己→自己における理想自己を達成しようとするを励ます)

- 3) 学校や地域における居場所づくりとしては、学童保育や児童館を中心に、対象を子どもに限定せずさまざまな活動が行われている。また学校以外の居場所として私営のフリースクールも設立されており、自分に合った居場所を選ぶことができる状況がある。

4、結論

居場所は、自分が信頼できる他者からありのままの自分を受け容れてもらえる場であり、さらにそこでは自己受容がなされている。自己受容は、居場所を構成する一要素であり、居場所づくりに働きかける可能性として大きな意味を持つものと考えられる。

居場所は物理的な空間を用意しただけで生まれるものではない。よって、居場所づくりを考える際、居場所を求める人たちがどのような状態にあり、何を求めているのかを注意深く考えていくことが必要だと考える。

5、主な参考文献

- 萩原健次郎「子ども・若者の居場所の条件」
田中治彦(編)；子ども・若者の居場所の構想
学陽書房 2001年
A. H. マズロー著/小口忠彦 訳「人間性の心理学：モチベーションとパーソナリティ」
改正新版 産業能率大学出版部, 1987年